

mediopos 2

2014.12.21 ~ 2015.1.7

【神秘学ポエジー～風遊戯 第9集】

media-photo-poesie ヴァージョン

神秘学遊戯団



上なるものは
下なるものに

遊び
遊ばせ
流れ
さすらい

下なるものは
上なるものに

真似び
苦しみ
祈り
捧げつ

苦しみは叡智となろう
祈りは光となろう

■高橋睦郎『遊ぶ日本／神あそぶゆえ人あそぶ』（集英社 2008.9）

「国語におけるアソビはほんらい神の動詞だった。神神の行動はすべてアソビで表現しえた。このアソビに人間が関わる方途はただ一つ、神神をアソバせることを通じて神神のアソビを真似び、これを神神の世界から人間の世界へ降ろすこと。このとき、アソビの主体である神神は人間の世界に流謫し、さすらったことになるだろう。とすれば、これを真似び、学んだ人間のアソビも、流謫。さすらいというかたちを取らざるをえない。まず神神の世界であるタカマノハラに叛逆した神としてのスサノヲが地上に追放され、タカマノハラの地上化ともいべき宮廷から危険分子として弾き出された半神ヤマトタケルが西から東へ、さらに西へとさすらい、これに準った皇族からの離脱者がさすらいの生涯を送り、只人・地下人のさすらいがこれにつづく。」



■吉田潮『TV大人の視聴』（講談社 2014.11）

「2013年あたりから流行しているのは「半沢直樹」的な右脳刺激劇場、つまりわかりやすい喜怒哀楽と勧善懲悪なのだが、「BORDER」は完全左脳系だ。生死や善悪の境界線にある小栗が視聴者にとっては嚆矢（みおつくし）となる。「感じるな、考えろ」と、逆ブルース・リーなのである。」

ぶらさげられたニンジンに向かって
ダッシュしていくのは悲しいことだ

なぜそこにニンジンがあり
ニンジンに向かっていくのかを問わねばならない

倍返しするのはほんとうはだれがだれになのか
その根っこにある自分のニンジンを観るのだ

正しいから正しいは正しくない
気持ちいいから気持ちいいは気持ちよくない

右か左かではなくそのボーダーにいること
善か悪かではなくそのボーダーにいること

mediopos-28
2014.12.22

神々は争う
まして人は

人のなかでも
神々は争う
むしろ人のなかで

人は神々の遊戯なのか
みずからが戦場とさえなって

戦いに勝ち得たものも
やがてはまた戦いに敗れていく

その連鎖のなかで
神々はなにを詠うのか

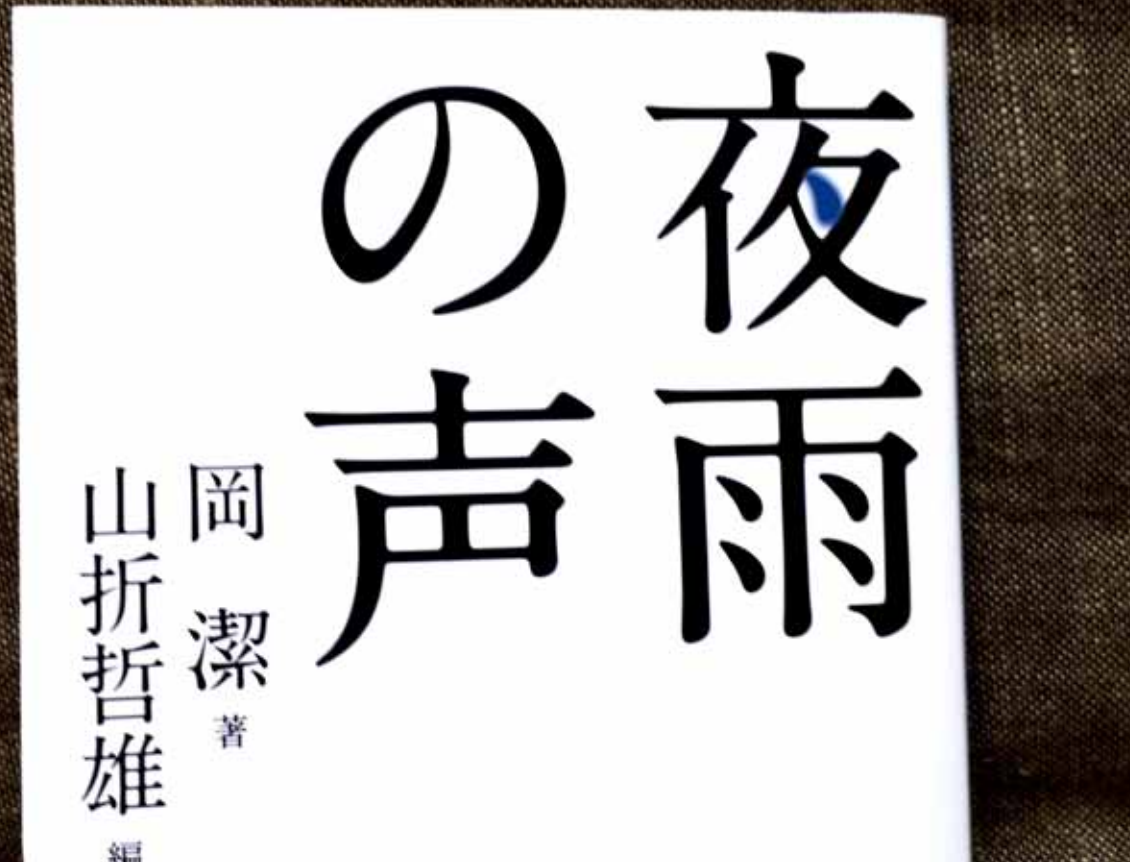
わたしのなかの神々よ
その詠を聴かせてくれないか

わたしのなかの神々よ
戦いの果てを見せてくれないか



■関裕二『天皇と鬼』（悟空出版 2014.11）

「秦氏は蘇我入鹿を殺し、中大兄皇子（天智天皇）と中臣鎌足のために働いた。そして親蘇我派・天武系王家になり代わって反蘇我派・天智系の光仁天皇が即位した。また、光仁天皇の子・桓武天皇が「秦氏の山背に都を造ろう」と持ちかけ、秦氏はこころよく協力した。とすれば平安朝成立の陰の功労者は秦氏になるはずだった。秦氏が手を汚して反蘇我派の王家は生まれたのだ。秦氏が山背の地を手放して平安京は生まれたのだ。／ところが秦氏はすべてを失った。しかも百済系の藤原氏は勝ち誇ったかのように新羅系の秦氏を蔑視していく。そして事実、秦河勝の末裔は差部されていくのである。」



自由をなくした心には
空ゆく羽がありません
羽があっても翔べぬまま
なくした自由をなんとかしよう

歌を忘れた心には
さえずる声がありません
声があっても歌知らず
忘れた歌をなんとかしよう

永遠知らぬ心には
時は無常に過ぎるもの
無とは虚しいだけのもの
知らぬ永遠をなんとかしよう

■岡潔『夜雨の声』（角川ソフィア文庫 平成 26 年 9 月）

「人の感情・意欲がわかるためには、見る人の感情・意欲が働いていなければならないといった。それでは感情・意欲が働いていさえすればそれでわかるかといえば、そうはいかないのであって、高い感情・意欲の状態からは、低い感情・意欲の状態は一目でわかるが、その逆はできないのである。／感情・意欲の高さを境地という。境地が高くなるほど見晴らしがきく。もっとも境地は高さきわまりなく、とうてい感情・意欲だけでは説明しきれものではなくて、心（情緒）全体を持ってこなければいけないと思う。（・・・）／人の意識の流れは、社会を流れている間はねばねばしていて非常に遅いが、「自他の別」「時空の框」と二つの峠をいちおう越えるごとに、だんだん速くなって、境地が十分高まれば必ずいぶん速い。」



つくりえるものから
まだみぬものへ

つくることは
きめられていない

かたちをこえたかたち
まだみぬもののこえをきく

わたしではないわたし
まだみぬわたしがいる

■樂 吉左衛門『ちawanや／二人の息子と若き人々へ』（淡交社 2012.4.5）

「差異の過程としての生命的なるものが、／進化と袖を分かち
内的な差異過程を歩むとすれば、／それは限りなき不確定性
の中に身を置くことになるだろう。因果の連合や加算ではな
く、／決して予見できない不可能性の最中、／それは単なる
偶発的なものとは異なるもの、／もちろん、歴史性への還元
を拒否するもの／即ち、「破」から「離」への過程。」

mediopos-31
2014.12.24

闇のない光は見えない
受苦を経て光は顕れる

死のない生はない
受難を経て生は死を昇華する

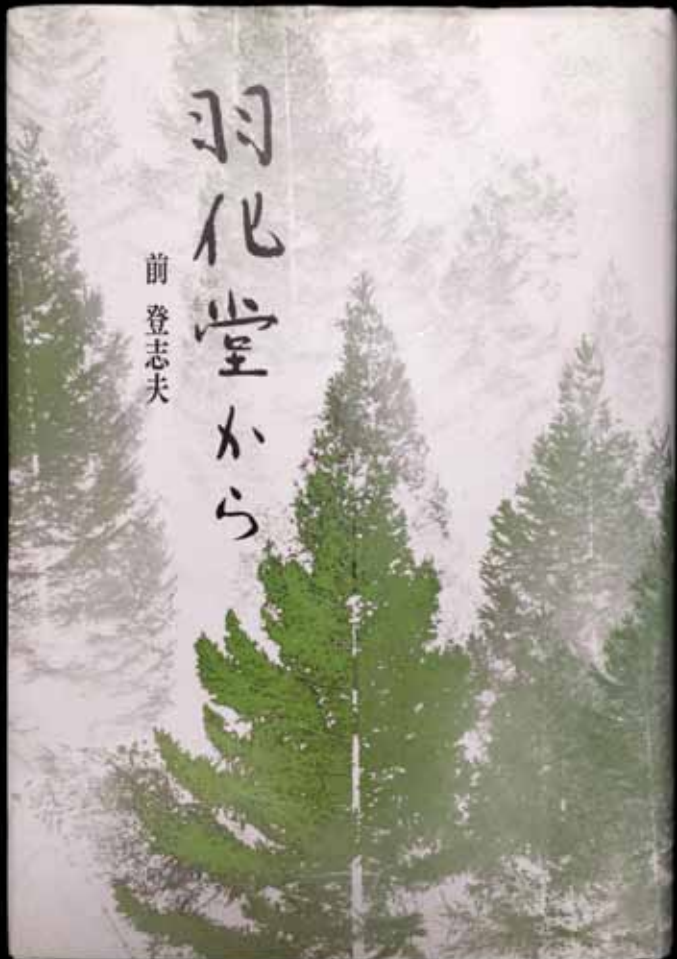
破のない離はない
かたちにはかたちなきものが生きる

光が光を超えて歩むために
暗闇のなかから霊が復活する

■ミヒャエル・エンデ『ものがたりの余白／エンデが最後に話したこと』
(聞き手・翻訳 田村都志夫 2000.2)

「ルドルフ・シュタイナー（の思想）から学んだことの多くは、わたしにとってきわめて大事なことですし、生に対するわたしの考えそのもの、決定的な礎石なのですが、しかし、芸術に関しては、そのかぎりではない。シュタイナーの芸術思想は、どうしてもわたしは受け入れることができないし、今でも間違いだと思っています。なぜかという、ひとこと言うならば、「暗黒が欠けている」と、言えるからです。（・・・）／直観として感じるものなのですが、日本人だだれでも、芸術作品には暗黒が必要だと知っている気がします。それに、鋭ささえも。」





羽化するために
かつては異界から
使者／死者が訪れた

海原を越えて
山の向こうから
川のはるか源から
天空の彼方から
大地の底から

いまや彼方から
使者／死者が訪れることはない
異界はみずからの内にある

それは闇と光をとめない
苦悩のうちに現れてくるだろう

わが内なる魂よ
十字架へと歩め
そして羽化するのだ

■前登志夫『羽化堂から』（メディアファクトリー 2009.4）

「海辺の人々にとっては、異界はつねに海原の向こうにあるものだが、山に住む人々にとっての異界は川上であった。／民話の世界の桃太郎も瓜子姫も、小川の上流から流れてくる桃や瓜のもたらしてくれるものであった。素戔鳴尊が箸の流れてきたのを見て遡った簸川（斐伊川）の神話も想起される。」



奏でるために
奏でぬ空へと
耳を啓く

言挙げするために
言挙げせぬ空へと
言葉を啓く

知るために
知らぬ空へと
知を啓く

我あるために
我なき空へと
我を啓く

■佐藤聡明『耳を啓く』（春秋社 2006.10）

「尺八であれ、異様に長い棹を持つ三弦にせよ、あるいは巨大としかいいようのない撥を用いる琵琶にしても、これらの楽器はある明確な意図のもとに演奏機能は退嬰させられている。／このような楽器のありようは、西欧楽器の持つ理念とは正反対の方向へと歩むものであり、楽器そのものに幽冥の蒼然が背負われていると感じられる。／ただ耳を啓くために意図されたからである。（・・・）／伝統音楽とは、その出自の奥深くに、思惟を否定し、理知を殺し、叡智をも葬り去る「空」のごとき世界がある。」

いのち 燃え
燃え尽きるとき

灰のなかより
みえない 姿

冴えたる いのち
よみがえり 燃えて

花の色 纏い
風の舞 踊り

夢は どこへゆく
魂よ どこへ帰る



■白洲正子・前登志夫『魂の居場所を求めて』（河出書房新社 2004.12）

「白洲／河合隼雄さんのご本で読んだんですけど、このごろ寿命が長くなったもので、第一の思春期と、第二の思春期というものがあるんですけど。その第二というのは中年になってからするから、つらいらしいんです。だけど、それを越えるととてもいいんだってことを書いてらしたの。(…)」 「前／若い頃でも、子供でも、「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」はわかります。ですけど、若いときはやっぱり花より団子ですし、こちらの生命力が衰えてくると、世界は透明になり、簡素になり、かえって人も桜もはげしく燃えてくる……。」



mediopos-35
2014.12.28

えんがちよ
切ったり切られたり

切るは不自由
切られるは自由

デラシネゆえに
えんがちよ越えて

異界へ至り
異界とむすぶ

むすんでひらいて
ふたたび帰る

えんがちよ
切ったり切られたり

えんがちよ越えて
世界はひらかれむすばれる

■中沢新一×五木寛之「網野さんともっとアジアや宗教の話をしたかった」
(現代思想2月臨時増刊号 総特集・網野善彦／無縁・悪党・「日本」への問い 平成26年12月)

「中沢／最近は、「絆を大切に」ってよく言うじゃないですか。つながっていく世界。けども、「非農業民」と網野さんが呼んだ人々、あるいは被差別に関わっている人々は、もともと流動的な生活形態をもっていて、その世界観の根本は、「切る」ということだったんじゃないかと思うのです。(…)
網野さんが『無縁・公界・楽』の研究にとり組みはじめた最初のきっかけは「えんがちよ」の遊びでした。(…) そういえば五木さんの人生の主題もずーっと「切る」てことだったような気がします。切られたり切ったり。」

mediopos-36
2014.12.28

限りないことに気づくために
限られたものとして生きる

永遠を知るために
今この時を生きる

愛を知るために
私というひとりとして生きる

■特別対談「上橋菜穂子×五十嵐大介」(KAWADE 夢ムック『総特集
五十嵐大介』所収(河出書房新社 2014.8))

「五十嵐／僕は、普段日常的にいえば、むしろ身体の内と外とが分断されちゃっている気がする事が多くて。たとえばさっきの神社に行ったときに、すごい嵐が強い日で、たぶん秋だったと思うんだけど、枯葉がざーっと落ちてきて、風が強くて、日が差して、自分の体とか地面の上を木の葉の影と木の葉がガーッとこう、流れていく。そうして風に吹かれながら立っているときに初めて一体化していく感覚みたいなのがあって、そのときのイメージをなんとか描けなかなみたいなことで、いろいろやっている部分があるかもしれない。(・・・)上橋／体が分断されているという感覚は、私も強く持っていて、それが人の哀しみの原点じゃないかな。言葉を持ったり、意識をもったりすることによって、世界の中にあるのに、世界とひとつながりではなくなっちゃった。だからこそ人は体というものに注目せざるをえないし、だからこそ有限性につながっていくような感覚がある。」



われ 生まれしは
深く 死するためなり

われ 生きるは
悲しみに 殉ずるためなり

なべての死者 ともにあゆみて
えにしを めぐるためなり

われ 生死のあわいをあゆみ
一期の道行 ひとりをきわめん

光は 苦しみの果て色を放ち
四季の風 草木鳥獣を祀り

われ 地を歩み空を仰ぎ
なべてのひとりを とともに道行かん

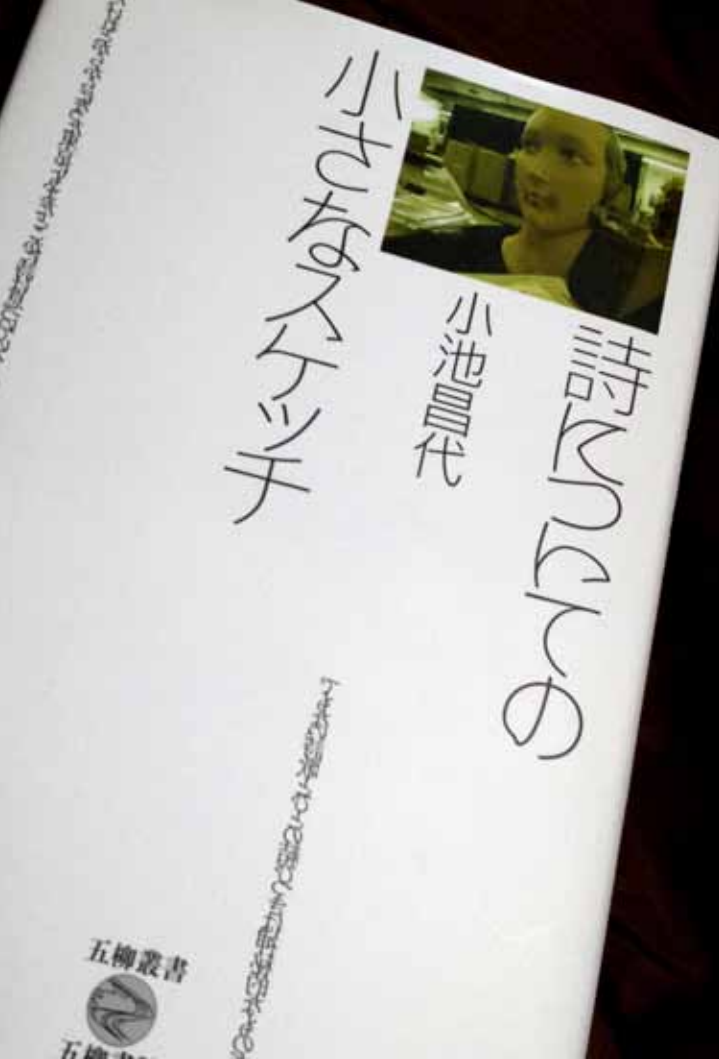


■志村ふくみ・石牟礼道子『遺言／対談と往復書簡』（筑摩書房 2014.10）

*石牟礼道子の詩「幻のえにし」

「生死のあわいにあればなつかしく候／みなみなまぼろしのえにしなり／御身の勤行に殉ずるにあらず／ひとえにわたくしのかなしみに殉ずるにあれば／道行のえにしはまぼろしふかくして／一期の闇のなかなりし／ひとわれもいのちの間際 かくばかりかなしきゆえに／煙立つ雪炎の海を行くごとくなれば／われより深く死なんとする鳥の眸に逢えるなり／はたまたその海の割るときあらわれて／地の低きところを這う虫に逢えるなり／この虫の死にざまに添わんとするときようやくにして／われもまたにんげんのいちいなりしや／かかるいのちのごとくなればこの世とはわが世のみにて我も御身も／ひとりのきわみの世を相果てるべく なつかしきかな／今ひとたびにんげんに生まるるべしや 生類の都はいずくなりや／わが祖は草の祖 四季の風を司り／魚の祭を祀りたまえども／生類の邑はすでになし／かりそめならず 今生の刻をゆくに／わがまみふかき雪なりしかな」

mediopos-38
2014.12.30



■小池昌代『詩についての小さなスケッチ』（五柳書院 2014.11）
「なぜ詩に惹かれたのか。わからない。わたしが仕方なく「詩」と言葉で呼んでいるあのものを、他の人は、同じように仕方なく他の言葉で呼んでいる可能性はある。それをつかみたいと追ってきた。が、詩は書けない。求めるしかないものだ。詩というものが、どこかに定まってあったのではなかった。詩というのは、わたしにとって言葉ですらなかった。」

私の名が呼ばれる
けれど
その名は
私であって私ではない

あなたの名を呼ぼうとする
けれど
その名は
あなたではないように感じられる

名が呼ばれるほどに
名を呼ぶほどに
ほんとうの名が
遠ざかってしまう

仮名と真名
かりそめの名とほんとうの名
ほんとうの名はどこにあるのだろう
私はみずからに問いかけてみる

すると
私が呼んでいる名の彼方で
鏡に映った姿のように
同じ問いかけをしている私がいる

かつて年を重ねることは
知恵を重ねることだった
からだも知恵を重ねた

からだが熟すところも熟し
生が熟すと死も熟していった

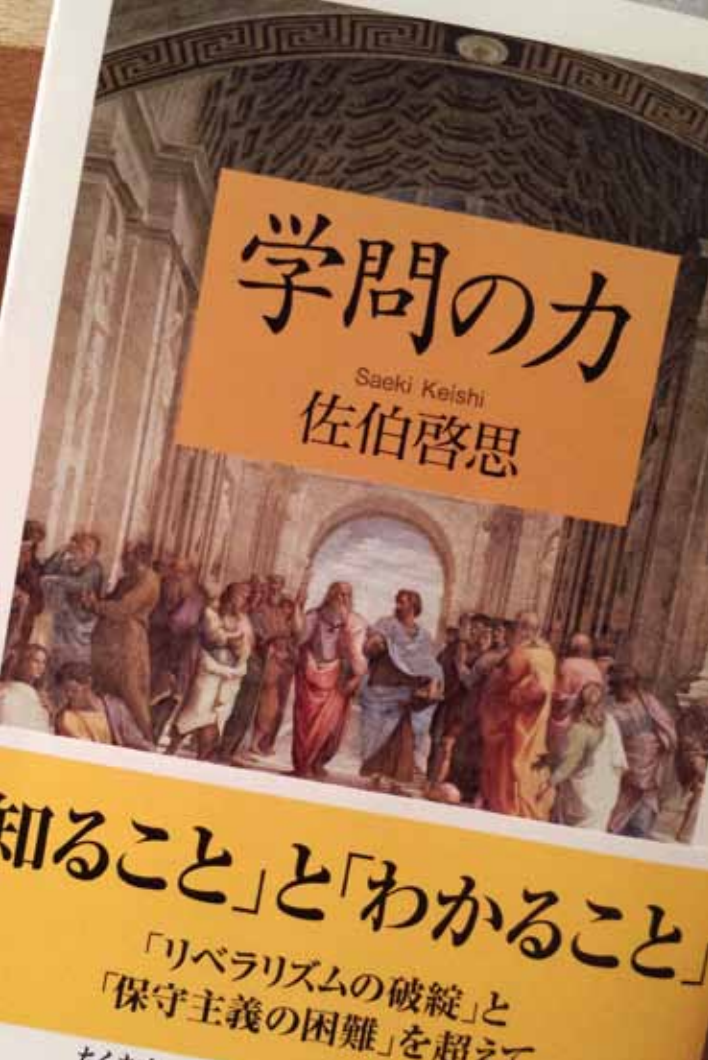
若いままでいようとすることは
知恵を得られないということだ
そこでは何も熟すことができない

からだが朽ちるところも朽ちてゆく
生が朽ちると死も朽ちてゆく



■安田登『日本人の身体』（ちくま新書 2014.9）

「現代は、「老い」を嫌悪しているように感じます。いや、嫌悪というよりも恐怖しているようにすら感じる。（…）／古典芸能の世界では逆です。「若い」というのは、相手を揶揄する言葉でこそあれ、決してほめる言葉ではありません。「ふん、若いな」といわれたりします。／（…）「若い」の語源は「弱い」とか「わずか」であるともいわれています。少なくとも上代においては、若いとは「幼い」という意味でした。未成熟な状態が「わかい」なのです。／それに対して「老い（老ゆ）」は「多い」とか「移ろう」が語源だといわれています。成熟した状態、さまざまなことを体験して大人になった状態、それが「老い」なのです。／ですからアンチ・エイジングなどは冗談ではない。できるだけ早く、自然に美しく年を取りたいと思っているのです。」



学ぶ

なにかからでも学ぶ

問う

ほんとうの問いを生きる

考える

自由を得るために

教わらない

教わることはできないから

教えない

教えることはできないから

愛する

深く学ぶことを

真摯に問うことを

自ら考えることを

■佐伯啓思『学問の力』（ちくま文庫 2014.12）

「学問は、本当は、「教わる」ものではなく、「学ぶ」ものなのです。もっといえば、「学び」かつ「問う」ものです。自らの「問い」を立て、そのために「学び」、そして、思索を深めることです。／これまで、われわれは、知識を「教わる」ものだと思ってきました。学校では、知識は先生から「教わる」もので、大学院生にとっては、知識は、指導教官から「教わる」もので、学者や研究者にとっては、知識は、外国の偉い先生から「教わる」ものだったのです。／しかし、「教わる」ことのできる知識などしれています。「しれている」というのは、その量がしれている、という意味ではなく、結局、本当の意味では身につかない。という意味です。」



目出度きかな 目出度きかな
千秋のみどりを成すは 松緑
鶴は千年 亀は万年

mediopos-41
2015.1.1

古川の絶えせぬ流れ ながめやれば
松は枝垂れ 木の間を塞ぎ
忽ち大木の傘となりにける

金銀珠玉も 蔵の内
靈魂体も 智慧の内
千秋のみどりを成して 松の傘

鶴は千年 亀は万年
人も巖に 霊の人とぞなりにける
目出度きかな 目出度きかな



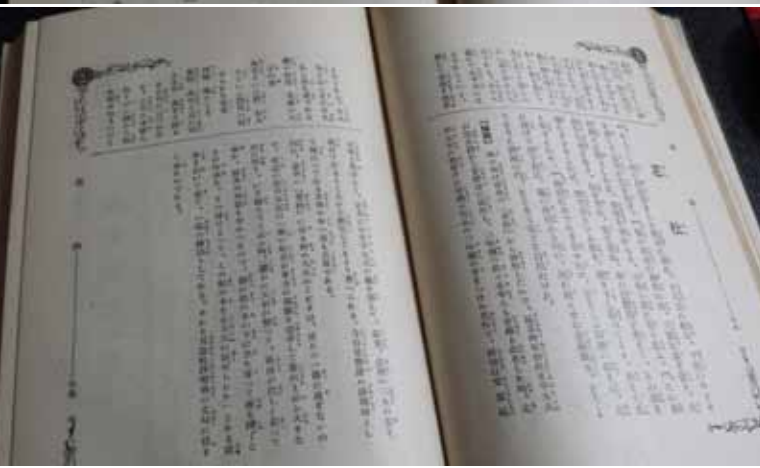
■『常磐津全集』（中内蝶二・田村西男 編集／誠文堂 昭和2年5月）

「そもそも松の目出度きこと萬木に優れ、十八公の粧ひ、千秋のみどりを成して古今の色を見ず。／秦の始皇帝の御狩の時、天俄に掻き曇り、大雨頻りに降りしかば、帝雨を凌がんと、小松の蔭に寄り給ふ。／この松忽ち大木となり、枝を垂れ、葉を重ね、木の間隙間を塞ぎて、その雨を洩らさざりしかば、帝大夫といふ爵を、贈り下し給ひてより、松を大夫と申すとかや。／斯様にめでたき松ヶ枝に、巢をくふ田鶴の齢をば、君に捧げて語子孫は、亀の萬劫のふる川の、流れ絶えせぬ金銀珠玉、どうどうどうと御蔵の内、をさまる家こそ目出度たけれ。」

「今日常磐津の浄瑠璃として傳はつている古曲の中の最も古曲である。」

「十八公 松の異名／松の字を分けると木と公となる。昔呉の丁固と云ふ人が松の樹が腹の上に生へた夢を見て、人に語って謂ふのに『松の字は十八公である。吾十八歳にてかならず公になるであらう』と、果たして其通り出世したとある。」

「萬劫／萬年を経るを古川に云ひけかける。古川に水絶えぬと云ふ諺から流れ絶えせぬとつづく」



どきどき どきどき

地図のない道は

いつも 新しい道

はるか はるか

行き先を決めない道は

かぎりない自由へ向かう道

どんな道も

いつも はじめて

いつも 新しい

どんな私も

いつも はじめて

いつも 新しい

どきどき どきどき

世界は いつも新しい

私はいつも まだ見たことのない私へ

■九鬼周造『偶然と驚きの哲学 九鬼哲学入門文選』

(書肆心水 2007.6)

「実に驚きは哲学の初めである。初めであるのみならず、また哲学の終わりである。哲学は驚きに発して、驚きに終わるのである。偉大な思想は心臓からくるという言葉があるが、現実の世界の偶然性に対して驚くこと、驚いて心臓に動悸を打たせることが、終始一貫して、哲学思索の原動力でなければならないと考えるのである。」





■三宅雄二郎（雪嶺）『宇宙』（實業之世界社 大正四年十一月）

「渾一の觀念、換言すれば、宇宙は斯くの如きものなりとする觀念は、人によって異なるもので、或は大なるあり或は小なるあり、小児のごとく父母と玩具とを以て宇宙の如くに考へてるものもあれば、婦女子の如く家を宇宙とするものもあり、又、一村一国を我が宇宙とするものもある。要するに、人の宇宙観は、その關係する處の廣くなるに随ひ廣くなるもので、その人の性質及び境遇により差異を生じ、概言すれば、時處位の推移に伴つて、人の宇宙観は變化するものである。」

「空間も無限、時間も亦無限である。随て、この無限の空間、時間の中に在つたもの、在らんとするものを悉く知らうとしても、夫れは不可能だ。今日、眼に觸るる星辰の團體以外に、他の團體があるかも知れず又無いかも知れぬ。或は此る團體が頗る多くあつて、夫れが集まつて更に絶大なる團體を成して居るものやら、其邊嶮と見當がつかぬ。何れにした處で、宇宙全體の過去現在未来を知るのとは不可能である。」

汝はいかなる存在か
それを問う者よ

汝の宇宙観を見つめよ
汝はその宇宙なり

汝の悩みを見つめよ
汝はその宇宙なり

汝の求めるものを見つめよ
汝はその宇宙なり

生死を超えんとするならば
汝はその宇宙の主たれ

求めよ さらば与えられん
求めるならば それに相應しき汝たれ



あらゆるものが奪われ
いのちさえ奪われたとしても
奪うことのできないものがある

私が私であること
それを奪うことはできない

与え与え与え尽くしたとしても
与えることのできないものがある
太陽でさえそれを与えることはできない

私が私であること
それを与えることはできないのだ

けれどさらに私は行かねばならない
私を超えた未知の私へ
すべてのひとりとして

■椎名林檎『音楽家のカルテ』（スイッチ・パブリッシング 2014.12）

「――そもそも今回のアルバムの見取り図を描き出したのはいつ頃でしたか？『既発表曲で最も古い『ありあまる富』（2009年）を書いた頃から、自分の書く歌詞に“陽の光”を指す語彙が増えてきているのに気付いて。そしていよいよ7月末から制作に取りかかり始めると、『このアルバムでは、“目抜き通り”を描きたい』と具体的に思い立ちました。するとかつてないくらいはっきりと、『日出処』というタイトルが浮かびました。』／――“目抜き通り”とはつまりメインストリートでありメインストリームのことですね。「日が当たる場所イコール文明社会というか。たとえば現代の都市部に生きていたら、少なからず自然を破壊している側として、その犠牲になっている反対側について気になるものですね。健全な心身と、極めて一般的な良心を持って生きている人々ならば。そんな人々に注ぐお天道様をイメージしました。（・・・）自然と自分とか、運命と自分とか、国と自分とか、自分と対象との関係性を捉えるような癖もついて。だからそれ以前はある意味子供の領域で書いていたんじゃないですか。単に大人になっただけだと思います」

mediopos-45

2015.1.3

ロゴスは 身体に
身体は 大地に

大地は 動きに
動きは 文字に

風のロゴスは
風の文字となり

花のロゴスは
花の文字となる

歩くとき
ロゴスは文字となって歩き

踊るとき
ロゴスは文字となって踊る

花は紅
柳は緑

山は山となり
海は海となり

私というロゴスは
一陣の風となって吹き渡る



■杉浦康平『文字の霊力』（工作舎 2014.9）

「文字を見、文字を憶え、文字を記す・・・という行為——人間と文字のかかわりが、外部に現れる書字行為ばかりでなく、身体という生命体の内部に刻みこまれたさまざま事象との深い協働関係に支えられたものであること。「内部協働」の集合体としての書字行動であることが、予感されるのではないだろうか。／（・・・）「漢字のカタチ」。それは単に、紙の上に記された一点一画が形づくるものではない。／太極拳のしなやかな動きを思い出すまでもなく、漢字の字形は、身体の動きに支えられて形づくられ、大自然に充満する「気の流れ」にも深く同調して形づくられるものでもあったのだ。」

mediopos-46
2015.1.3

天が結び 地が結び
天と地が結びますように

神が結び 鬼が結び
神と鬼が結びますように

主が結び 客が結び
主と客が結びますように

霊が結び 物が結び
霊と物が結びますように

国が結び 場が結び
国と場が結びますように

有が結び 無が結び
有と無が結びますように

日が結び 月が結び 地が結び
日と月と地が結びますように

山本
哲士

古事記の逆立解説
国つ神論



■山本哲士『国つ神論／古事記の逆立解説』（文化科学高等研究院出版局 2013.2）

「国津神は、明治天皇制における国家神道の編制によって、合祀され、消された。危うい、いつ反乱するかもしれない「荒ぶる神々」を置いたままにしておくことは近代国家の統一において容認しがたかったのだ。だが完全には抹消はしえなかった。国津神に向けて天津神を導いてやった猿田彦は、神社の境内の外側に配置された。これも抹消はできず、日田では道路や神社の屏の外に石碑が遺されて置かれていたり、だいじなことは、いかなる神であるのかという神の姿の实在ではない、自分たちが場所にいかに関与しているかの、生活者の「心性と思想」の威力としてである、折口的にいえば、場所の魂としての場所住民自身の幻想的存在表象が国津神である。／場所を喪失しての環境の設計はありえない。等質的な社会空間設計においては、環境は経済的な均質空間化されたものであるにすぎず、場所<環境>ではない。環境的生存がもはや不可能になっている近代産業社会の究極の限界の現在において、新たに場所環境を設計していくうえでの思想・心性の軸をどこにおくのが問われているのだが、その根源的なことが<国津神>にからんでいる。共同的な観念・幻想の遺制が不可視であろうとも、それは、わたしたちの日常の心性のどこかにのこっているのだ。（・・・）／国津神論は、ナショナル論理ではない、場所論理である。場所を「有」として農村共同体と合一化し実体化してしまうと、かつての郷土のウルトラ・ナショナルイズムへの接ぎ木されてしまう、場所は西田の云う「絶対無の場所」として「もの」を対象へと産み出す、そこに古代的・前古代的の心性が関与してくるものとみていかないと誤る、国津神と天津神へ従属させないことだが、天津神を消してしまったなら、国津神の存在根拠も失われてしまう。／ひとつ一つの神社からさまざまな国津神がときはなれて、古代的な場所心性へ回帰した想像力をもって、場所が自律していく未来を設計していくことを真に祈る。」

おーい 雲よ
心の青空に遊ぶ 雲よ

おーい 心よ
晴れたり曇ったりする 心よ

風に流され雨など降らし
喜怒哀楽が激しいときも

ゆるりばかりのんびりと
穏やかな散策を遊ぶときも

変容自在なその姿
わたしに楽しく見せておくれ



■ギャビン・プレイター=ピニー 『「雲」の楽しみ方』（桃井緑美子訳／河出書房新社 2007.7）

「雲を愛でる会 声明書／われら雲を愛でる会は、雲が不当にも悪者扱いられていると考える。雲がなければ人生は果てしなく味気ないのである。／われら雲を愛でる会は、雲は自然のうたう詩だと思っている。万人にひらかれた雲は、自然が誰にでも分け隔てなくその姿を見せてくれるものである。われら雲を愛でる会は、「青空一辺倒思考」と戦うことを誓う。くる日もくる日も雲のない単調な空を眺めなくてはならなかったら、人生は退屈くわまりない。／われら雲を愛でる会は、人々が雲は大気の気分を表したものだ気づいてくれることを願う。表情から人の気持ちを読みとるように、雲から大気の気分を読みとれるのである。／われら雲を愛でる会は、雲が夢を追う人のものであり、雲を眺めることが魂の癒しになると信じる。雲に何かの形を見出す人は精神分析医にかかる費用を節約できる。／よって、われら雲を愛でる会は耳を傾けてくれる人にならずこう勧める。／空を見上げ、あの一瞬の美に驚嘆しなさい。そして雲のなかに頭を突っ込み、空想にふけてお暮らしなさい。」



■吉田健一『思い出すままに』（講談社文芸文庫 1993.7）
〔IV 本を読むというは……〕

〔XII 早く年を取ることが出来ればと……〕より

「子供が、或は子供も読む種類の物語風のものが子供にも殊に喜ばれるのは眼を曇らせる余計なものが何もないからでこのことは大人にも通用し、ただ幼稚とか他愛もないとか頭を使う必要がないとかいうことを念頭に置いて子供の為に話を書いて子供心に触れるに至ることがない。（・・・）／眼が冴えた人間が言葉を選び、或は言葉を選ぶ仕事はその人間の眼を冴えさせてその言葉が我々を酔わせる。或はその人間と同様に我々に正確にものを見させる。これはお伽噺から哲学、その他凡て言葉で出来ているものに及ぶことでその点でお伽噺を読み耽る子供と一篇の論文を読む大人は全く同じ所において又子供がそうして論文を読まないとは限らない。更にそのことで理解されるのはお伽噺も名文でなければお伽噺でないということでそのことは子供の方でも知っている。（・・・）／幾何学をやるものが一つの図形に対する時にそこに夢があると言える。それが図形であることで凡ての図形というものとその性質に繋がることになるからでそこに一つの考えが浮かぶのも夢みることの所産である。この性格が失われるから一般に考えるということが逆に精神から動きを奪うことと取り違えられるので壁に向かっていて何年たってもただ向かっているだけならばそこからどういふものも生じない。寧ろそうして体が静止していることで精神は無限に自由に働くことを得るのでその自由から考えといふこれも動くのを止めないものが生じる。」

「人間には成熟すること自体他に目的がない。それは人間であるから人間になることであってそれが簡単なことでないから若いうちというのが長い間続く。その上で人間になって

死んだ言葉で編まれた籠に
生きたところは包めない

幼稚な言葉で書かれた噺
幼稚なころへ運びゆく

自由な言葉で遊んだ知恵で
誘う世界は無限の天地

生きた言葉と自由なころ
永遠さがす旅となる

時は熟して人を変え
生死を越えた旅をする

からが余りに短いということがあるだろうか。これはいい思いをするのがなるべく長く続くことを望むということと違って今ここにいるというのは今ここにいることでそのことに長いとか短いとかいうことはない。それが終わるのは死ぬ時だからで死に際して思いつくことができるのはそれまでの成熟の仕方がまだ不十分だったのである。】



■マイケル・ウェランド『砂／文明と自然』（林裕美子訳／築地書館 2011.8）

「砂漠に吹き寄せる風に乗って砂が動くとき、砂は独特のふるまいをする。気体のようでもあれば、地面いっぱいこぼれて広がる液体窒素のようにもなり、まるで固体ではない物質になったかのような。砂丘の頂上から噴霧された砂は日の光にきらめき、薄絹が舞うように波打ち、広がっては消える。するとすぐに、蜘蛛の糸で織った次なる幕が現れ、戯れ、踊る。これは砂漠の精霊ジンのなせる業だろうか。沈む夕日に映える美しい光景には心を奪われるが。風が強くなってくると美の世界はまたたく間に消え失せ、砂嵐の横暴があたりに満ちあふれる。砂漠を満たす砂のすべてが地面を飛び跳ね、風と一緒に突進してくるかのようだ。地表面にあるものはすべてが動きまわり、大きな砂の粒子でさえ、転がり、つまずき、小さな粒子をつき飛ばして飛び立たせたりもする。青空はなくなり、砂が風のうなりを増幅させ、どこもかしこも砂だらけになって息もできなくなる。」

ひとりのとき
ふたりのとき
数人になったとき
群れになったとき
別人のようにいる人がいるのはなぜだろう

砂粒も
一粒だけでは
ただの転がる粒子のままなのに
砂漠の砂のように群れ集い踊ると
波になったり嵐のようにふるまったりもする

けれど人は砂粒ではないだろう
群れて我をなくすのは
なくしたい我があるからかもしれない
そして我をなにかに明け渡し
ときに大きな怪物のようにふるまってしまう

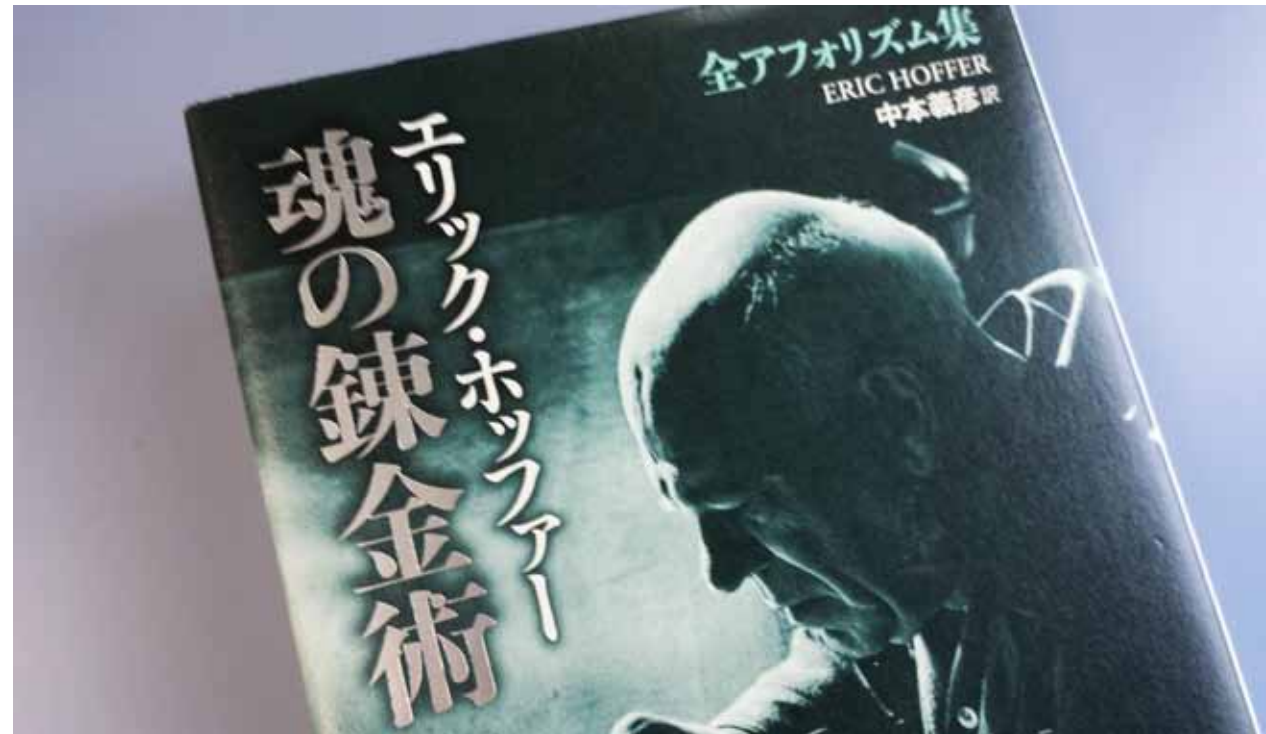
どんなときもひとりでいられるならば
そんなひとりが集まれば
まとまってひとつの大きな光となるだろう
みんなのひとりがひとりのみんなになって
世界を明るく照らすだろう

みずからを問わず
追い求める者よ
どこへ行こうとしているのか

みずからの空白を
埋められない者よ
なにを求めようとしているのか

火宅から連れ出す
羊鹿牛の三車さえも
火宅に油を注いでしまう

追い求めること
それそのものを問わねばならぬ
それが汝を火宅から連れ出す導きとなる



■『エリック・ホッファー 魂の錬金術／全アフォリズム集』（中本義彦訳 作品社 2003.2）

「情熱の大半には、自己からの逃避がひそんでいる。何かを情熱的に追求する者は、すべて逃亡者に似た特徴をもっている。／われわれが何かを情熱的に追求するということは、必ずしもそれを本当に欲していることや、それに対する特別な適性があることを意味しない。（…）いかなる情熱的な追求においても、重要なのは追求の対象ではなく、追求という行為それ自体なのである。」

*三車：羊の車鹿の車牛の車（法華経の「三車火宅」の喩え／譬喩品より）